

## 仏教系生命保険会社の生成と破綻について

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター 深見泰孝

我が国には、明治 20 年代後半から 30 年代にかけて、仏教教団や僧侶らに直接、間接的に支援を受けて営業を行っていた生命保険会社が存在した。こうした特徴をもつ会社は、仏教系生命保険会社（以下、仏教系生保と略記）と呼ばれている。このように、宗教教団が生命保険会社の経営を支援していたことは、世界中でも珍しい事例であり、それゆえに、仏教系生保の存在は我が国の保険業史上の特徴とも言われている。

こうした特徴をもつ仏教系生保は、契約者募集において教団などから支援を受けていたこともあり、他社よりも優位に契約者募集を進められたにもかかわらず、その多くが短命に終わった。本報告は、仏教系生保の生成と破綻に至った経過を明らかにし、加えて、仏教系生保が我が国の保険業史上において果たした役割を明らかにしたいと考えている。

最初に、仏教系生保の設立理由を分析し、そこにどのような特徴があるのかを考察した。従来の研究では、仏教系生保の設立理由は教団の財政悪化に求められているが、そうではなく、仏教系生保の設立理由は大きく次の二つに分けられることが明らかになった。一つは、悪化した教団財政を支援することを目的とした会社であり、もう一つは、外国人の内地雑居の開始に伴って勢力拡大が予想されるキリスト教に対して各教団が行った慈善事業などの資金獲得を目的とした会社である。

次に、仏教系生保の特徴である僧侶や教団による会社への関わり方を分析した。すると、初期に設立された会社は、有志の僧侶が会社に所属して契約者を募集し、その見返りとして僧侶個人へ寄付が行われていた事例や、一部の僧侶が契約者募集を支援し、保険金の一部が各寺院へ寄付されていた（教団の組織的関与は認められない）。ところが、真宗信徒生命の設立、成功をきっかけとして、教団が会社を支援し、利益の一部を教団へ寄付するという形態（教団の組織的関与が認められる）へと変化する。

では、このように僧侶や教団から支援を受けていた仏教系生保は、なぜその多くが短命に終わるのであろうか。そのことを明らかにするため、仏教系生保と三大生保（明治生命・帝国生命・日本生命）を中心とする一般の生保を比較し、その上で破綻した仏教系生保を個別に分析して、破綻要因を検討した。

一般の生保との比較を通じて明らかになった諸点は次のとおりであった。大手中堅

## 【平成 21 年度日本保険学会大会】

### 第 I セッション

報告要旨：深見泰孝

---

各社が保有契約高を伸ばす中、多くの仏教系生保のそれは伸び悩む。また、仏教系生保の事業費率は、一部の例外はあるものの他社と比べて高率であった。そのためか、一般の生保が保険業法施行を契機として責任準備金を積み増したのに対し、多くの仏教系生保は責任準備金を積み増せなかった。以上から、多くの仏教系生保の経営上の特徴として、事業費率が高く、経営は非効率であり、責任準備金の積み立てが少ないことが言える。

また、資産運用においても大手中堅生保との違いが明らかとなる。三大生保は大手鉄道会社など当時最もリスクが低いと思われる銘柄で資産を運用していたのに対し、仏教系生保は、役員が兼務する地方銀行、破綻や経営が悪化した銀行への預金を中心であった。中でも、破綻した仏教系生保のそれは、解散直前期に実態不明のハイリスク銘柄への株式投資や、財政整理中の仏教教団への資金提供、不良銀行への多額の預金など、安全性、確実性を求めねばならない生保の資産運用からは逸脱していた。

そして、このような経営が行えた理由を明らかにするべく、個別事例（六条生命・日宗生命）を取り上げて仏教系生保の破綻理由を分析した。その結果、六条生命の事例では、会社の支配株主であり、多額の負債を抱えていた東本願寺への会社資金の流用や利益提供が行われていたことが考えられる。また、日宗生命の事例では、シナジー効果を狙って設立した日宗火災が破綻し、それ以来、無謀な資産運用が行われたり生保経営者にはふさわしくない人物へ支配権が異動していることが明らかになった。このことから、仏教系生保の破綻要因は、先行研究で言われている、保険数理を理解していなかったことや、責任準備金に対する認識欠如、非効率的な事業運営、杜撰な募集計画に加えて、経営者を規律づけるメカニズムが存在せず、経営者の宗教上の地位も経営者の暴走を止められない一因となったのではなかろうかと考えられるのである。

ただ、仏教系生保は、僧侶や教団が保険募集を支援して、宗教的側面が極めて強い方法で契約者募集をしていた。そのため、顧客層は、有産階級を中心とした三大生保とは異なり、農民や低所得者層を中心としていた。そのことは、結果として保険制度やその効用すら知らなかった人々に、保険思想を普及させることにつながったのではないかと考えられるのである。すなわち、仏教系生保は、結果として我が国の生命保険需要者の底辺拡大に寄与したという点に意義が認められるのではなかろうか。